

今まで狛江市は、いい住宅地として育ってきたかなという風に思います。緑もとても多いし農地もとても多いし、多摩川もある。ところが人口8万人を抱えて、これから狛江市は「住」住むことを前提とした環境の充実はもちろんですけど、コロナ禍を踏まえて、働くという機能だとか遊ぶという機能、遊ぶというのは悪い意味では全然なくて、人間には必ず遊びの要素が必要なことから、楽しむこと、それからさきほどの中高生のお話にもある生活に必要なものを買うことができる、あるいは外の方々がたまに「狛江に行きたいね」と思える観光、そういった住まいの機能以外の都市としては本来絶対必要な機能を考えていかなければいけないのかなと思います。

日本の都市というのは、「ベッドタウン」というように「寝て、帰る」ところであったのが、今日のワークを聞いていて、もっと働いたり楽しんだりという機能を充実した、ひとつの自立した都市として、独立した都市として、もちろん調布や世田谷に接してはいますが、狛江市の中でかなりの生活ができる、この必要性はコロナ禍によって痛切に感じているところで、これが20年後の姿に少しずつ活かしていかなければならないのではないかと思います。

そのためのキーワードとなるのが、聞きなれた言葉で言えば「コンパクトシティ」「スモールシティ」「コミュニティ」、こうしたものが全部共通して狛江市という人口8万人の中で他に依存しないで中できちんと生活できることを目指したキーワードだと思います。そういうことを本日のワークショップで確認できたと思います。

大正時代、昭和の戦前・戦後に活躍した都市計画家で石川栄耀（いしかわえいよう）という方がいらっしゃいます。今日の東京の基礎を作られた方で、都市計画学会の賞で最も有名な「石川賞」というものが創られている方でもあります。その石川氏の言葉にこのようなものがあります。

「社会への愛情を都市計画という。」

なかなか含蓄のある言葉です。これを少し変換して、「狛江への愛情を形にするのが我々の都市計画マスタープランである」と言い換えたいと思います。

狛江に住んでいる自分たち、それから家族、コミュニティの人たちに対する愛情。これを形にしていこう、空間にしていこう、システムにしていこう、これを狛江市の都市計画と呼ぼう、というものです。これをほんの一部でもお手伝いするのが策定委員であつたりします。

今日いただいた様々なご提案をそこに反映するべく努力していきますけれど、また皆様のご意見をいただく機会を、この一回限りでなくこれからも何回か計画していきますので、引き続き皆様のご協力をどうぞよろしくお願いします。